

竜

芥川龍之介

青空文庫

宇治うじの大納言隆国だいなごんたかくに「やれ、やれ、昼寝の夢が覚めて見れば、今日はまた一段と暑いよ

うじや。あの松まつケ枝えの藤ふじの花さえ、ゆざりとさせるほどの風も吹かぬ。いつもは涼しゅう聞える泉の音も、どうやら油蟬あせの声にまぎれて、反かえつて暑苦しゅうなつてしもうた。どれ、また童部わらんべたちに煽あおいででも貰もらおうか。

「何、往來のものどもが集あつた？ ではそちらへ参ると致いたそう。童部わらんべたちもその大団おおうち扇あふを忘れずに後からかついで参れ。

「やあ、皆のもの、予が隆国たかくにじや。大肌ぬぎの無礼は赦ゆるしてくれい。

「さて今日はその方どもにちと頼たのみたい事があつて、わざと、この宇治の亭へ足を止めて貰もらうたのじや。と申すはこの頃ふとここへ参つて、予も人並ひとらに双紙そうしを一つ綴とろうと思おもい立つたが、つらつら独り考かんえて見れば、生憎あいにく予はこれと云いうて、筆ふでにするほどの話も知らぬ。さりながらあだ面倒めんどうな趣向しゆきやうなどを凝こらすのも、予のような怠おろそけものには、何より億おく劫うせんばん千万せんばんじや。ついでには今日から往來のその方どもに、今は昔の物語を一つずつ聞かせ

て貰うて、それを双紙に編みなそうと思う。さすれば内裡の内、外ばかりうろついて居る予などには、思いもよらぬ逸事奇聞が、舟にも載せ車にも積むほど、四方から集って参るに相違あるまい。何と、皆のもの、迷惑ながらこの所望を叶えてくれる訳には行くまいか。「何、叶えてくれる？ それは重畳、では早速一同の話を順々にこれで聞くと致そう。「こりや童部たち、一座へ風が通うように、その大団扇で煽いでくれい。それで少しは涼しくもなろうと申すものじや。鋳物師も陶器造も遠慮は入らぬ。二人ともずつこの机のほとりへ参れ。鮎売の女も日が近くば、桶はその縁の隅へ置いたが好いぞ。わ法師も金鼓を外したらどうじや。そこな侍も山伏も簞を敷いたろうな。「よいか、支度が整うたら、まず第一に年かきな陶器造の翁から、何なりとも話してくれい。」

二

翁「これは、これは、御叮嚀な御挨拶で、下賤な私どもの申し上げます話を、一々双紙へ書いてやろうと仰有います——そればかりでも、私の身にとりまして、どのくらい

恐多いかわかりません。が、御辞退申しましては反かえつて御意ぎよに逆さう道理でございますから、御免を蒙たわつて、一通り多たわ曖いもない昔話を申し上げると致いたしましょう。どうか御退屈ごたいくつでもし
ばらくの間、御耳を御借し下さいまし。

「私わたくしどものまだ年若な時分、奈良に蔵くらうど人得業とくごう恵印えいんと申しまして、途方とほうもなく鼻の大きい法師ほうしが一人居りました。しかもその鼻の先が、まるで蜂にでも刺されたかと思うくらい、年が年中恐しくまつ赤なのでございます。そこで奈良の町のものが、これに諱名あだなをつけまして、鼻蔵はなくら——と申しますのは、元来大鼻の蔵くらうど人得業とくごうと呼ばれたのでございますが、それではちと長すぎると申しますので、やがて誰云うとなく鼻蔵はなくらうど人と申し囃はやしました。が、しばらく致しますと、それでもまだ長いと申しますので、さてこそ鼻蔵鼻蔵と、謡うたわれるようになったのでございます。現に私も一兩度、その頃奈良の興こう福寺ふくじの寺内で見かけた事がございますが、いかさま鼻蔵とでも譏そしられそうな、世にも見事な赤鼻てんくばなの天狗鼻てんくばなでございました。その鼻蔵の、鼻蔵人の、大鼻の蔵人得業の恵印法師えいんほうしが、ある夜の事、弟子もつれずにただ一人そつと猿ざる沢さわの池のほとりへ参りまして、あの采女うねめ柳やなぎの前の堤つつみへ、『三月三日この池より竜昇えいんらんずるなり』と筆太に書いた建札を、高々と一本打ちました。けれども恵印えいんは実の所、猿沢の池に竜などがほんとうに住んでいたかどうか、心得ていた

訳ではございません。ましてその竜が三月三日に天^{てんじょう}上すると申す事は、全く口から出まかせの法螺^{ほら}なのでございます。いや、どちらかと申しましたら、天上しないと申す方がまだ確かだったのでございましょう。ではどうしてそんな入らざる真似を致したかと申しますと、恵印は日頃から奈良の僧俗が何かにつけて自分の鼻を笑いものにするのが不平なので、今度こそこの鼻藏人がうまく一番かついだ拳句^{あげく}、さんざん笑い返してやろうと、こう云う魂胆^{こんたん}で悪戯^{いたずら}にとりかかったのでございます。御前^{ごぜん}などが御聞きになりましたら、さぞ笑^{しょうし}止な事と思召ししようが、何分今は昔の御話で、その頃はかような悪戯を致しますものが、とかくどこにもあり勝ちでございました。

「さてあくる日、第一にこの建札を見つけましたのは、毎朝興福寺の如来^{にょらいさま}様を拝みに参ります婆^{ぢやう}さんで、これが珠数^{じゆず}をかけた手に竹杖^{ちくじやう}をせつせとつき立てながら、まだ霏^{せいや}のかかっている池のほとりへ来かかりますと、昨日^{きのう}までなかった建札が、采女柳の下に立っています。はて法会^{ほうえ}の建札にしては妙な所に立っているなど不審には思ったのでございますが、何分文字が読めませんので、そのまま通りすぎようと致しました時、折よく向うから偏^{へんさん}衫^{せん}を着た法師が一人、通りかかったものでございますから、頼んで読んで貰いますと、何しろ『三月三日この池より竜昇らんずるなり』で、——誰でもこれには驚いたでござい

ましょう。その婆さんも呆氣にとられて、曲った腰をのしながら、『この池に竜などが居
 りましようかいな。』と、とぼんと法師の顔を見上げますと、法師は反って落ち着き払つ
 て、『昔、唐のある学者が眉の上に瘤が出来て、痒うてたまらんだ事があるが、ある日
 一天俄に掻き曇つて、雷雨車軸を流すがごとく降り注いだと見てあれば、たちまちその瘤
 がふつつと裂けて、中から一匹の黒竜が雲を捲いて一文字に昇天したと云う話もござる。
 瘤の中にさえ竜が居たなら、ましてこれほどの池の底には、何十匹となく蛟 竜 毒蛇が
 蟠つて居ようも知れぬ道理じゃ。』と、説法したそうでございます。何しろ出家に妄語
 はないと日頃から思いこんだ婆さんの事でございますから、これを聞いて肝を消しますま
 い事か、『成程そう承りますれば、どうやらあの辺の水の色が怪しいように見えますわい
 な。』で、まだ三月三日にもなりませんのに、法師を独り後に残して、喘ぎ喘ぎ念仏を申
 しながら、竹杖をつく間もまだるこしそうに急いで逃げてしまいました。後で人目がござ
 いませんでしたら、腹を抱えたかったのはこの法師で——これはそうでございます。よう。
 実はあの発頭人の得業恵印、諱名は鼻蔵が、もう昨夜建てた高札にひっかかった
 鳥がありそうだからいな、はなはだ怪しからん量見で、容子を見ながら、池のほとりを、
 歩いて居ったのでございますから。が、婆さんの行った後には、もう早立ちの旅人と見え

て、伴ともの下人げにんに荷を負わせた虫の垂衣たれぎぬの女が一人、市女笠いちめがさの下から建札を読んで居るのでございます。そこで恵印は大事をとつて、一生懸命笑を噛み殺しながら、自分も建札の前に立つて一応読むようなふりをする、あの大鼻の赤鼻をさも不思議そうに鳴らして見せて、それからのそのそ興福寺こうふくじの方へ引返して参りました。

「すると興福寺なんだいもんの南大門なんだいもんの前で、思いがけなく顔を合せましたのは、同じ坊に住んで居った恵門えもんと申す法師でございます。それが恵印えいんに出会いますと、ふだんから片意地なげじげじ眉をちよいとひそめて、『御坊ごぼうには珍しい早起きでござるな。これは天気が変わるかも知れませぬぞ。』と申しますから、こちらは得たり賢しと鼻を一ぱいににやつきながら、『いかにも天気ぐらゐは変わるかも知れませぬて。聞けばあの猿沢の池から三月三日には、竜が天上するとか申すではござらぬか。』と、したり顔に答えました。これを聞いた恵門は疑わしように、じろりと恵印の顔を睨ねめましたが、すぐに喉を鳴らしながらせせら笑つて、『御坊は善い夢を見られたな。いやさ、竜の天上するなどと申す夢は吉兆じゃとか聞いた事がござる。』と、鉢はちの開ひらいた頭あたまを聳そびかされたまま、行きすぎようと致しましたが、恵印はまるで独り言のように、『はてさて、縁無しゆじき衆しゆじ生せいは度どし難つがしじや。』と、呟つぶいた声でも聞えたのでございましょう。麻緒あさおの足駄あしだの歯よじをよつて、憎々にくにくしげにふり返ります

と、まるで法論でもしかけそうな勢いで、『それとも竜が天上すると申す、しかとした証
 拠がござるかな。』と問い詰るのでございます。そこで恵印はわざと悠々と、もう朝日の
 光がさし始めた池の方を指さしまして、『愚僧の申す事が疑わしければ、あの采女柳の
 前まへにある高札こうさつを読まれたがよろしゅうござろう。』と、見下みくだすように答えました。これ
 にはさすがに片意地な恵門も、少しは鋒ほこぎを挫かれたのか、眩まぶしそうな瞬またたきを一つすると、
 『ははあ、そのような高札こうさつが建ちましたか。』と氣のない声で云い捨てながら、またて
 くてくと歩き出しましたが、今度は鉢の開いた頭を傾けて、何やら考えて行くらしいので
 ございます。その後姿を見送つた鼻藏はなくらうど人の可笑おかしさは、大抵御推察が参りましよう。恵
 印いんはどうやら赤鼻の奥がむず痒かゆいような心もちがして、しかつめらしく南大門なんだいもんの石段を
 上つて行く中にも、思わず吹き出さずには居られませんでした。

「その朝でさえ『三月三日この池より竜昇らんずるなり』の建札は、これほどの利きき目が
 ございましたから、まして一日二日と経つて見ますと、奈良の町中どこへ行つても、この
 猿沢さるさわの池の竜の噂うわさが出ない所はございません。元より中には『あの建札も誰かの悪戯いたずら
 であろう。』など申すものもございましたが、折から京では神泉苑しんせんえんの竜が天上致したな
 どと申す評判もございましたので、そう云うものさえ内心では半信半疑と申しましようか、

事によるとそんな大変があるかも知れないぐらいな気にはなつて居つたのでございます。するとここにまた思いもよらない不思議が起つたと申しますのは、春日の御社に仕えて居りますある禰宜の一人娘で、とつて九つになりますのが、その後十日と経たない中に、ある夜母の膝を枕にしてうとうとと致して居りますと、天から一匹の黒竜が雲のように降つて来て、『わしいよいよ三月三日に天上する事になつたが、決してお前たち町のものに迷惑はかけない心算だから、どうか安心していてくれい。』と人語を放つて申しました。そこで娘は目がさめるとすぐにこれこれこうこうと母親に話しましたので、さては猿沢の池の竜が夢枕に立つたのだと、たちまちまたそれが町中の大評判になつたではございせんか。こうなると話にも尾緒がついて、やれあすこの稚児にも竜が憑いて歌を詠んだの、やれここの巫女にも竜が現れて託宣をしたのと、まるでその猿沢の池の竜が今にもあの水の上へ、首でも出しそうな騒ぎでございます。いや、首までは出しも致しますまいが、その中に竜の正体を、目のあたりにしかと見とどけたと申す男さえ出て参りました。これは毎朝川魚を市へ売りに出ます老爺で、その日もまだうす暗いのに猿沢の池へかかりますと、あの采女柳の枝垂れたあたり、建札のある堤の下に漫々と湛えた夜明け前の水が、そこだけほんのりとうす明く見えたそうでございます。何分にも竜の噂がやかましい

時分でございますから、『さては竜神の御出ましか。』と、嬉しいともつかず、恐し
 いてもつかず、ただぶるぶる胸震いをしながら、川魚の荷をそこへ置くなり、ぬき足に
 そつと忍び寄ると、采女柳につかまって、透かすように、池を窺いました。するとそのほ
 の明い水の底に、黒金の鎖を巻いたような何とも知れない怪しい物が、じつと蟠つて居
 りましたが、たちまち人音に驚いたのか、ずりりとそのとぐろをほどこきますと、見る見
 る池の面に水脈が立つて、怪しい物の姿はどことも知れず消え失せてしまったそうでござ
 います。が、これを見ました老爺は、やがて総身に汗をかいて、荷を下した所へ来て見
 ますと、いつの間にか鯉鮒合せて二十尾もいた商売物がなくなっていたそうでござい
 ますから、『大方劫を経た獺にでも欺されたのであらう。』などと晒うものもございま
 した。けれども中には『竜王が鎮護遊ばすあの池に獺の棲もう筈もないから、それはきつ
 と竜王が魚鱗の命を御憫みになつて、御自分のいらつしやる池の中へ御召し寄せなす
 ったのに相違ない。』と申すものも、思いのほか多かつたようでございます。

「こちらは鼻蔵の恵印法師で、『三月三日この池より竜昇らんずるなり』の建札が大評
 判になるにつけ、内々あの鼻をうごめかしては、にやにや笑つて居りましたが、やが
 てその三月三日も四五日の中に迫つて参りますと、驚いた事には摂津の国桜井にいる叔

母の尼が、是非その竜の昇天を見物したいと申すので、遠い路をはるばると上つて参つたではございませんか。これには恵印も当惑して、嚇すやら、賺すやら、いろいろな手を尽して桜井へ帰つて貰おうと致しましたが、叔母は、『わしもこの年じやで、竜王の御姿をたつた一目拝みさえすれば、もう往生しても本望じや。』と、剛情にも腰を据えて、甥の申す事などには耳を借そうとも致しません。と申してあの建札は自分が悪戯に建てたのだとも、今更白状する訳には参りませんから、恵印もとうとう我が折つて、三月三日まではその叔母の世話を引き受けたばかりでなく、当日は一しよに竜神の天上する所を見に行くと云う約束までもさせられました。さてこうなつて考えますと、叔母の尼さえ竜の事を聞き伝えたのでございますから、大和の国内は申すまでもなく、摂津の国、和泉の国、河内の国を始めとして、事によると播磨の国、山城の国、近江の国、丹波の国のあたりまでも、もうこの噂が一円にひろまつているのでございましょう。つまり奈良の老若をかつごうと思つてした悪戯が、思いもよらず四方の国々で何万人とも知れない人間を瞞す事になつてしまつたのでございます。恵印はそう思いますと、可笑しいよりは何となく空恐しい気が先に立つて、朝夕叔母の尼の案内がてら、つれ立つて奈良の寺々を見物して歩いて居ります間も、とんと検非違使の眼を偷んで、身を隠している罪人のよう

な後めたい思いがして居りました。が、時々往来のものの話などで、あの建札へこの頃は香花が手向けてあると云う噂を聞く事でもございませと、やはり気味の悪い一方では、一かど大手柄でも建てたような嬉しい気が致すのでございませ。

「その内に追い追ひ日数が経つて、とうとう竜の天上する三月三日になってしまいました。そこで恵印は約束の手前、今更ほかに致し方もございませんから、渋々叔母の尼の伴をして、猿沢の池が一目に見えるあの興福寺の南大門の石段の上へ参りました。丁度その日は空もほがらかに晴れ渡つて、門の風鐸を鳴らすほどの風さえ吹く気色はございませんでしたが、それでも今日と云う今日を待ち兼ねていた見物は、奈良の町は申すに及ばず、河内、和泉、摂津、播磨、山城、近江、丹波の国々からも押し寄せて参つたのでございませう。石段の上に立つて眺めますと、見渡す限り西も東も一面の人の海で、それがまた末はほのぼのと霞をかけた二条の大路のはてのはてまで、ありとあらゆる烏帽子の波をざわめかせて居るのでございませ。と思つとそのところどころには、青糸毛だの、赤糸毛だの、あるいはまた梅檀庇だのの数寄を凝らした牛車が、のつしりとあたりの人波を抑えて、屋形に打つた金銀の金具を折からうらかな春の日ざしに、眩ゆくきらめかせて居りました。そのほか、日傘をかざすもの、平張を空に張り渡すもの、あるい

はまた仰々しく棧敷を路に連ねるもの——まるで目の下の池のまわりは時ならない加茂の祭でも渡りそうな景色でございます。これを見た恵印法師はまさかあの建札を立てたばかりで、これほどの大騒ぎが始まるうとは夢にも思わずに居りましたから、さも呆れ返ったように叔母の尼の方をふり向きますと、『いやはや、飛んでもない人出でござるな。』と情けない声で申したきり、さすがに今日は大鼻を鳴らすだけの元氣も出ないと見えて、そのまま南大門の柱の根がたへ意氣地なく蹲つてしまいました。

「けれども元より叔母の尼には、恵印のそんな腹の底が呑みこめる訳もございせんから、こちらは頭巾もずり落ちるほど一生懸命首を延ばして、あちらこちらを見渡しながら、成程竜神の御棲まいになる池の景色は格別だの、これほどの人出がした上からは、きつと竜神も御姿を御現わしなさるだろうのと、何かと恵印をつかまえては話しかけるのでございませぬ。そこでこちらも柱の根がたに坐つてばかりは居られませんので、嫌々腰を擡げて見ますと、ここにも揉烏帽子や侍烏帽子が人山を築いて居りましたが、その中に交つてあの恵門法師も、相不変鉢の開いた頭を一きわ高く聳やかせながら、鶉の目もふらず池の方を眺めて居るではございせんか。恵印は急に今までの情けない気もちも忘れてしまつて、ただこの男さえかついでやつたと云う可笑しさに独り撥られながら、『御坊』と一

つ声をかけて、それから『御坊も竜の天上を御覧かな。』とからかうように申しましたが、惠門は横柄おうへいにふりかえると、思いのほか真面目な顔で、『さようでござる。御同様だいぶ大分待ち遠い思いをしますな。』と、例のげじげじ眉も動かさずに答えるのでございます。これはちと薬が利きすぎた——と思うと、浮いた声も自然に出なくなってしまいましたから、惠印はまた元の通り世にも心細そうな顔をして、ぼんやり人の海の向うにある猿沢ざるさわの池を見下しました。が、池はもう温ぬるんだらしい底光りのする水の面おもてに、堤をめぐった桜や柳を鮮にじつと映したまま、いつになつても竜などを天上させる気色けしきもございませぬ。殊にそのまわりの何里四方が、隙き間もなく見物の人数にんずで埋うずまってでもいるせいか、今日は池の広さが日頃より一層狭く見えるようで、第一ここに竜が居ると云うそれがそもそも途方とほうもない嘘のような気が致すのでございます。

「が、一時いっときいっとき一時と時の移つて行くのも知らないように、見物は皆片唾かたずを飲んで、氣長に竜の天上を待ちかまえて居るのでございましょう。門の下の人の海は益ます広ますがつて行くばかりで、しばらくする内には牛車ぎつしやの数かずも、所によつては車の軸かたが互に押し合いへし合うほど、多くなつて参りました。それを見た惠印の情けなさは、大概前からの行きがかりでも、御推察が参るでございましょう。が、ここに妙な事が起つたと申しますのは、どう云

うものか、恵印の心にもほんとうに竜が昇りそうな——それも始はどちらかと申すと、昇らない事もなさそうな気がし出した事でございませう。恵印は元よりあの高札こうさつを打った人でございませうから、そんな莫迦ばかげた気きのすることはありそうもないものでございませうが、目の下で寄せつ返しつしている烏帽子えぼしの波を見て居りますと、どうもそんな大変たいへんが起りそうな気が致してなりません。これは見物の人数の心もちがいつとなく鼻蔵はなくらにも乗り移つたのでございませうか。それともあの建札けんさつを建てたばかりに、こんな騒さわぎが始まつたと思つと、何となく気が咎とがめるので、知らず知らずほんとうに竜が昇つてくれれば好いいと念じ出したのでございませうか。その辺の事情はともかくも、あの高札の文句を書いたものは自分だと重々じゅうじゅう承知しながら、それでも恵印は次第次第に情けない気もちが薄くなつて、自分も叔母の尼と同じように飽かず池の面おもてを眺め始めました。また成程なるほどそう云う気が起りでも致しませんでしたら、昇る気づかいのない竜を待つて、いかに不承不承ふしょうぶしょうとは申すものの、南大門なんだいもんの下に小こ一日も立つて居る訳には参りますまい。

「けれども猿沢の池は前の通り、漣さざなみも立てずに春の日ざしを照り返して居るばかりでございませう。空もやはりほがらかに晴れ渡つて、拳こぶしほどの雲の影さえ漂つて居る容ようす子はございませう。が、見物は相不変あいかわらず、日傘の陰にも、平張ひらばりの下にも、あるいはまた棧敷さじきの欄干

のうしろ後にも、ぞくぞく簾々と重なり重なって、朝からひる午へ、午からゆうべ夕へ日影が移るのも忘れたように、竜王が姿を現すのを今か今かと待つて居りました。

「するとえいん恵印がそこへ来てから、やがて半日もすぎた時分、まるで線香の煙のような一すじの雲がなかぞら中空にたなびいたと思いますと、見る間にそれが大きくなって、今までのどかに晴れていた空が、にわか俄にうす暗く変りました。その途端とたんに一陣の風がさつと、猿沢の池に落ちて、鏡のように見えた水の面に無数の波を描えがきましたが、さすがに覚悟はしていながら慌てまどつた見物が、あれよあれよと申す間もなく、天を傾けてまっ白にどつと雨が降り出したではございませんか。のみならずかみなり神鳴も急に凄しく鳴りはためいて、絶えずいなすま稲妻が梭のように飛びちがうのでございます。それが一度鍵の手に群る雲を引つ裂いて、余る勢いに池の水を柱のごとく捲き起したようでございますが、恵印の眼にはその刹那、その水煙と雲との間に、こんじき金色の爪を閃ひらめかせて一文字に空へ昇つて行く十丈あまりの黒竜が、もつろう朦朧として映りました。が、それはまたた瞬く暇で、あと後はただ風雨の中に、池をめぐつた桜の花がまっ暗な空へ飛ぶのばかり見えたと申す事でございます——度を失つた見物が右往左往に逃げ惑つて、池にも劣らない人波を稲妻の下で打たせた事は、今更別にくだくだしく申し上るまでもございますまい。

「さてその内に豪雨ごううもやんで、青空が雲間くもまに見え出しますと、恵印は鼻の大きいのも忘れ
たような顔色で、きよろきよろあたりを見廻しました。一体今見た竜の姿は眼のせいでは
なかつたらうか——そう思うと、自分が高札を打った当人だけに、どうも竜の天上するな
どと申す事は、なさそうな気も致して参ります。と申して、見た事は確かに見たのでござ
いますから、考えれば考えるほど益審ますまけんでたまりません。そこで側の柱かたわらの下に死んだように
なつて坐つていた叔母の尼を抱だき起しますと、妙にてれた容子ようすも隠しきれないで、『竜を
御覽ごらんじられたかな。』と臆病らしく尋ねました。すると叔母は大息をついて、しばらくは
口もきけないのか、ただ何度となく恐ろしそうに頷うなずくばかりでございましたが、やがてま
た震え声で、『見たとももの、見たとももの、金色こんじきの爪ばかり閃ひらかいた、一面にまつ黒な竜り
神ゆじん じやろが。』と答えるのでございます。して見ますと竜を見たのは、何も鼻藏人はなくろうじん
の得業とくごう恵印えいんの眼のせいばかりではなかつたのでございましょう。いや、後で世間の評判
を聞きますと、その日そこに居合せた老若男女ろうにやくなんによは、大抵皆雲の中に黒竜の天へ昇る姿
を見たと申す事でございました。

「その後恵印は何かの拍子ひょうしに、実はあの建札は自分の悪戯いたずらだったと申す事を白状して
しまいました。が、恵門を始め仲間の法師は一人もその白状をほんとうとは思わなかつたそ

うでございます。これで一体あの建札の悪戯は凶星に中つたのでございませうか。それとも的を外れたのでございませうか。鼻蔵の、鼻蔵人の、大鼻の蔵人得業の恵印法師に尋ねましても、恐らくこの返答ばかりは致し兼ねるのに相違ございますまい……」

三

宇治大納言隆国「なるほどこれは面妖な話じや。昔はあの猿沢池にも、竜が棲んで居つたと見えるな。何、昔もいたかどうか分らぬ。いや、昔は棲んで居つたに相違あるまい。昔は天が下の人間も皆心から水底には竜が住むと思うて居つた。さすれば竜もおのずから天地の間に飛行して、神のごとく折々は不思議な姿を現した筈じや。が、予に談議を致させるよりは、その方どもの話を聞かせてくれい。次は行脚の法師の番じやな。

「何、その方の物語は、池の尾の禅智内供とか申す鼻の長い法師の事じや？ これはまた鼻蔵の後だけに、一段と面白かろう。では早速話してくれい。——」

(大正八年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集³」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1998年12月8日公開

2004年3月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

竜

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>